

みんなでとろう インパクトファクター

GTCSの取り組み

General Thoracic and Cardiovascular Surgery (GTCS) は
日本胸部外科学会、日本呼吸器外科学会のOfficial Journal、
日本心臓血管外科学会のAffiliated Journalです

「胸突き八丁、今年前半が勝負！」 会誌編集委員長 大北 裕

General Thoracic
and Cardiovascular
Surgery

Official Publication of
The Japanese Association for
Thoracic Surgery

Official Publication of
The Japanese Association for
Chest Surgery

Affiliated Publication of
The Japanese Society for
Cardiovascular Surgery

勝負は
今年前半です！
(2015年)

おかげさまで2014年度仮IFが0.70
近くなってきました。2015年度には
0.90に達する見込みです。
あともう少しの頑張りが必要です。
2015年上半期にGTCS 2013、
2014年論文を積極的に
引用して下さい。

平素よりGTCSには多大なご厚情を賜っております。予てからの念願であるインパクトファクター (IF) 獲得には未だ至らず、会誌編集委員長として忸怩たる思いです。しかしながら、本誌の仮IFは2011年0.511、2012年0.502、2013年0.528、現時点での2014年0.693と着実に増加しています(図1)。もう少し詳しく言いますと、2011年IF対象の過去2年間GTCS掲載論文数は262編で、2011年に他雑誌に引用されたGTCS論文数は134編ですからIFは(134/262=0.511)となります。同様に2012年は(150/299=0.502)、2013年(181/343=0.528)、2014年(208/300=0.693)となります(図2)。また、IF0.693は2014年2月現在の数値ですが、IF値は毎年5月ころまでは徐々に上昇しますので、2014年度仮IFは7.0を超えるものと予想しています。ここで注目して頂きたいのは、分母にあたる論文総数が日本胸部外科学会とSpringer社との契約上、毎年減少しており、2014年度の300編から2015年度は245編となることと、掲載論文の内訳が“引用されることの少ない症例報告”が少なくなり(会誌編集委員会の方針です)、“引用度数の多い原著、レビュー論文”が増加していることです(図3、4)。

また、GTCSが引用数は毎年20ほどの自然増が見込まれていますので、我々の予想として2015年度IFは(220/245=0.898)程度は見込めると考えています。Thomson Reuter社によるIF獲得の目安は仮IF1.0ですので、会誌編集委員会として何とかこれに接近したいと考えています。日本胸部外科学会員8,000名の皆様があと、もう20回、GTCS論文を引用していただくだけで仮IFは1.00を達成できます。100人の会員がGTCS論文を1回引用することにより、仮IFは0.3上昇します。2015年発行のIF取得済みの他誌論文に250回GTCS論文を引用していただくとIF=1となります。

現在は2015年度までの実績を以て2016年度にIF再申請(前回申請は2009年)を目論んでいます。2015年度の実績は、皆様が2013年、2014年度に掲載されたGTCS論文を引用して、その論文をすでにIFを獲得している雑誌にsubmitして、2015年に印刷媒体でprintされねば

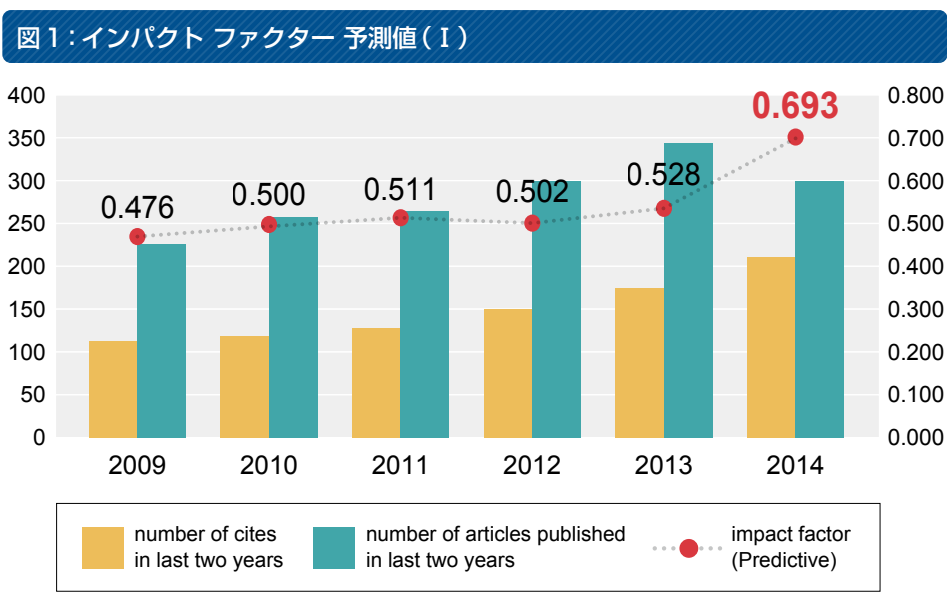
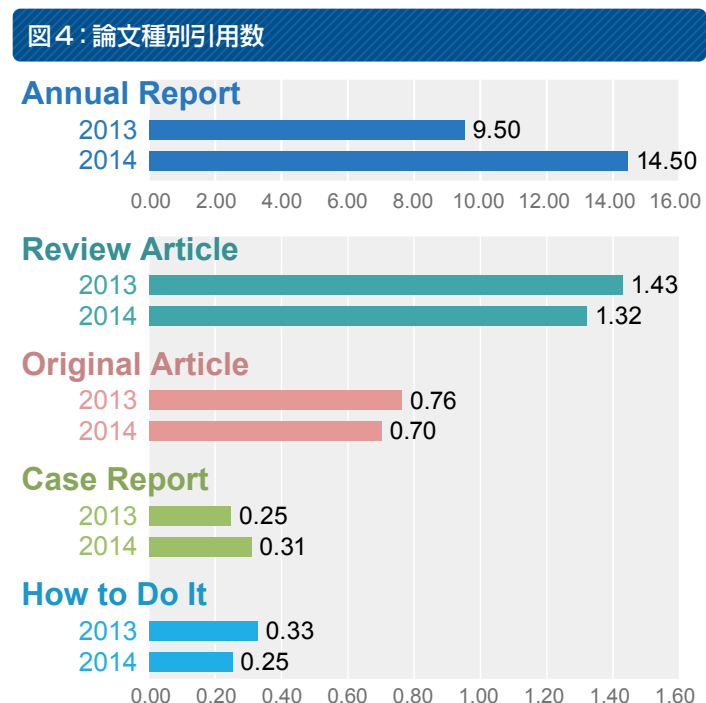
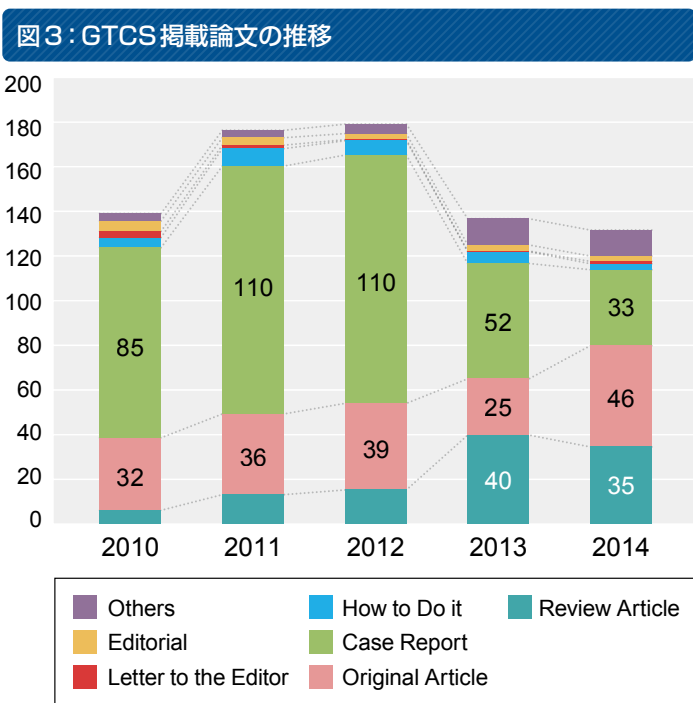


図2：インパクトファクター 予測値 (II)

Pub Year	# of cites in last 2 years	# of articles published	# of citation by Pub year							calculated IF
			2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009	
2015										1.00 (hopefully)
2014	208	300		15						0.693
2013	181	343		93	18					0.528
2012	150	299		115	72	4				0.502
2011	134	262		93	109	50	4			0.511
2010	128	256		77	75	100	42	4		0.500
2009	111	233			59	82	92	36	3	0.476



を示しました(図5)。また、心臓、呼吸器、食道各領域の分野別の2013-2014年論文リストはGTCSホームページ(http://www.jpats.org/modules/journal/index.php?content_id=1)に掲載しています。また本年から、GTCSホームページ上に直近90日のダウンロード回数上位5篇の論文をフリーアクセスとしていますし、引用頻度の高い本学会学術委員会の学術調査報告書(Annual report by The Japanese Association for Thoracic Surgery)も本年度からフリーアクセスとなっています(<http://www.springer.com/medicine/surgery/journal/11748?hideChart=1#realtime>)。

また、評議員各位が英文誌の査読をお務めになるときに、GTCS論文の引用をお奨め頂くようお願い申し上げます。

誤解のなきように申し上げますが、現在のところ、IFが付いていないGTCS論文をご執筆のGTCS投稿用論文に引用されても、GTCS IF獲得には寄与しません。GTCS IF獲得の暁には是非ともGTCS論文を引用して頂くようお願い申し上げます。また、過去(2012年以前)のGTCS論文を引用されても2015年以降のIFには寄与しませんので御注意願います。

一方で、GTCS会誌編集委員会ではIF算出の分母となる論文数を可及的に減らすため、現在、症例報告やHow-to-do-it論文の採択率を30%以下に制限しています。勿論、優秀な論文はその限りではあ

図5: Top 10 cited articles in 2014 (published in 2012-2013)

Title	Author	Article Type	Year	Volume	Issue	Page	Number of Citations
Thoracic and cardiovascular surgery in Japan during 2010	Kuwano et al.	Annual Report	2012	60	10	680-708	17
Thoracic and cardiovascular surgery in Japan during 2011	Amano et al.	Annual Report	2013	61	10	578-607	12
Thymoma and thymic carcinoma	Venuta et al.	Guest Review Article	2012	60	1	1-12	7
Heart transplantation in Japan: a critical appraisal for the results and future prospects	Kitamura	Current Topics Review Article	2012	60	10	639-644	7
Risk-adjusted and case-matched comparative study between antegrade and retrograde cerebral perfusion during aortic arch surgery: based on the Japan Adult Cardiovascular Surgery Database	Usui et al.	Original Article	2012	60	3	132-139	5
Epigenetic alterations and their clinical implications in esophageal squamous cell carcinoma	Toh et al.	Current Topics Review Article	2013	61	5	262-269	5
Treatments for esophageal cancer: a review	Kato et al.	Current Topics Review Article	2013	61	6	330-335	5
Chronic lung allograft dysfunction after lung transplantation: the moving target	Sato	Current Topics Review Article	2013	61	2	67-78	4
Surgical treatment for primary lung cancer combined with idiopathic pulmonary fibrosis	Watanabe et al.	Current Topics Review Article	2013	61	5	254-261	4
Current status and perspective of EBUS-TBNA	Nakajima et al.	Current Topics Review Article	2013	61	7	390-396	4

りませんが、皆様にご不便をおかけしていますが、ご理解頂きたいと存じます。

以上、GTCSは2016年にIF再申請予定ですので2015年が勝負の年となります。今後はGTCSIF獲得へ向けて胸突き八丁、“2013年”と“2014年”のGTCSから皆様への論文への引用をお願いします！

GTCSが真の国際誌と評価されるべく、会員の皆様におかれましては、今後一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

日本胸部外科学会
Webサイトに
お勧め論文を
掲載しています！

<http://www.jpats.org/>

女性医師が活躍するフィールド

「ピンチはチャンス」

飽くなき好奇心と探究心、前向きな気持ちで、心臓血管外科医として邁進していく。

心臓手術のクリエイティビティとダイナミックさ、そして手術によって劇的に症状が改善する患者さんを目の当たりにして、2000年に心臓外科医を志し、東京女子医大の心臓血管外科(当時の心研外科)に入局しました。入局当時の勤務状況は壮絶とも言えるものでしたが、「一度決意したからには最低10年は歯を食いしばってでも続けよう、それでダメなら諦めよう」と思い、ご指導いただいた素晴らしい先輩方のおかげで2008年に

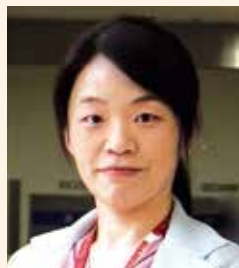
は心臓血管外科専門医を取得しました(非常に悔しいですが症例数不足で維持できず、現在は失効しました)。その後、結婚・出産というチャンスに恵まれましたが、育児と心臓血管外科医の両立に一度挫折いたしました。しかし山崎健二教授のご配慮で常勤の短時間勤務枠で2年間働き、現在はフルタイムの常勤で当直(月4～5回)も緊急対応もしております。

専門は先天性心疾患です。出産・育児

の経験から、先天性心疾患の子供を持つご家族の不安を少しでも和らげられたらと思い「こどもの心臓病と手術」という患者さんのご家族向けの解説本を出版しました。最近は重症心不全に対する補助人工心臓治療にも取り組んでいます。育児・家事と仕事の両立に関しては「ロールモデル」と言うほど手本になるようなことはやっていませんが、自分が悩んだり困ったりした経験や、それを乗り越えて解決した経験は、出し惜しみなく後輩

に伝えたいと思っています。また、男女問わず外科医の労働環境改善、特に「手術」という外科医のスペシャリティが存分に研鑽できる「魅力ある外科」の労働環境を目指し、昨今の「若手の外科医離れ」対策として、自身の経験や女性の視点を活かしたいと思っています。

「ピンチはチャンス」をモットーに、飽くなき好奇心と探究心、前向きな気持ちで、心臓血管外科医としてこれからも邁進していく所存です。



立石 実
(東京女子医科大学 心臓血管外科)
卒業大学: 熊本大学
経歴: 2000年 東京女子医科大学 日本心臓血圧研究所 外科 入局
その後、佼成病院、聖隷浜松病院、富山県立中央病院、京都府立医科大学に出向。2008年に女兒を出産、その後一旦東京女子医科大学 心臓血管外科で非常勤、短時間勤務を経て、2013年4月から助教として勤務。
趣味: 読書、ピアノ演奏、芸術鑑賞、スポーツ観戦(野球など)、最近は家族でローラースケート(初心者)
好きな言葉: 「Stay Hungry, Stay Foolish.」「守破離」

学術集会の参加には 会員証

学術集会の参加には会員証が必要です。紛失・破損・汚損や改姓・改名された方は会員証再発行のお手続きをお早めに。詳細は学会HPをご確認ください。



が必要です

<http://www.jpats.org/>

呼吸器外科サマースクール

今年も開催します！

2015
7/11(土)・12(日)

【会場】
神戸医療機器開発センター(MEDDEC)
ニチイ学館ポートアイランドセンター

心臓血管外科サマースクール

2015
8/22(土)・23(日)

【会場】
テルモメディカルプラネックス

参加申込など詳細は日本呼吸器外科学会、日本心臓血管外科学会、当会のHPをご覧ください。



胸部外科学会今昔について執筆依頼があり何を書くべきか迷いつつ承諾した。現在は、インターネットで何事も検索可能な時代であり、ネットでもあまり検索できない事柄について主に書いてみることにした。

私の育った時代は戦中・戦後という異常な状況下であり、人間形成にも多大の影響を受けたため、私事となり恐縮だが、昔話に少々お付き合い願いたい。

私は1930年生まれの道産子で、父が若くして校長となったため、電気も水田（稲作）も無い道北の片田舎で小学校卒業まで過した。交通手段の乏しい時代に医療施設まで10Kmの道程は厳しく、この頃から医者になるよう仕向けられ、また抵抗なく受け入れていた。

1941年の開戦時は小学5年、終戦時は旧制中学3年、中学は旭川（現旭川東高）で、進学のため12歳で親元を離れ、食糧難の時代に早くから他人の飯を食う羽目になり、狡賢さはこの辺りから養成された。

終戦の年は1年間授業停止のお布令が出、近郊の農家で11月まで勤労奉仕を続けたが、異常な時代の経験から、共に過した仲間は親兄弟同様に“死なばもろとも”の思いが強く植えつけられ、この精神は今でも生きている。1948年、北海道大学予科に入学、ここでも新制大学への切り替えに遭うなど特殊な時勢に翻弄されつつ、流れに身を委ねるだけの人生だったが、父に叩き込まれたど根性と、戦時中鍛えられた不屈の精神とで、プラス思考の人生を過した。

1951年、札幌医大へ入学。学生時代は野球部に属し、よく遊び、よく飲んだ。

インターンは1年間院内へ泊り込みで修練した。因みに当時はまだ局所麻酔、平圧開胸で肺手術を行っていた施設もあった。

当時札幌医大は「大外科制度」で、一般外科、脳外科、胸部外科があり、一般外科へ入局した。翌年、地方病院へ出張、9ヵ月後帰局、直ぐに胸部外科へ3ヵ月のローテーション。後釜が当時流行の肝炎で3ヵ月延長となり、和田寿郎先生（当時は独身、助教授）が“皆酒だけ飲んで去ってしまう”と呟かれた言葉が胸に刺さり、そのまま居座ることになった。

当時大学での生活は無給であり、出張しなければ無収入であった。私は何故かあまり出張がなく大学での生活が多かったため、家内は質屋通いで筆筭が空になった話を後ほど聞き、以後幾分態度を小さくして接している。



胸部外科学会評議員会後の一刻 昭和30年卒の同期の桜と得意のポーズで
左から（敬称略）：小松作蔵、大石喜六、毛利 平、徳永皓一



1983年4月 韓国 ソウル 第6回アジア胸部外科学会での一コマ
左から（敬称略）：草川 實、瀬在幸安、川島康生、和田寿郎、麻田 栄、小松作蔵、調 丞治、岩 喬

私は何時の頃からか大勢集まって楽しい酒を飲むのが好きで、学会の折など各地で夜の巷を満喫させていただいた。酒の席では昼間は聞くことのできない話や、畏れ多くて傍に近寄り難い大先輩からご高説を拝聴できる機会もある。木本誠二先生の深い、鋭い洞察力に驚き、榊原仟先生の洒脱な会話や軽やかなダンスに瞠目したり、石川七郎先生の“山登りは小指1本で生死が決まる。君は無理だな”と85Kgの私を見ての笑顔、中山恒明先生はジョニ黒（ウイスキー）を愛飲され、当時札幌医大外科に史実にも造詣の深い高山坦三教授がおられたが、“高山はハイマウンテン、俺はミドルマウンテンだが、世界的にはミドルが上かな”と豪快にジョークを飛ばされたこと、勲一等瑞宝章の叙勲記念品は今でも温存している。これら大先達との触れ合いはその後の人間形成の糧ともなり、酒には本当に感謝している。

当時は、胸部外科学会と心臓血管外科学会と両方主宰することが多く、どちらか一方にしようかと提案し、同意を得たのも酒の席からであった。

私はどちらかといえばものぐさ（懶）で“今日やるべきことは明日だってできる”という方で、自ら積極的に行動するより流れに身を任せ、与えられた環境で最善を尽くすという人生を送ってきた。しかし、個人的にはずぼらだが組織の一員となると何故か妙に生真面目になり、几帳面すぎる人格に一変する。会員は皆平等との精神から意固地すぎるほど届出期日を厳守したり、理事会は毅然とした態度で臨むべきことを頑なに主張し、関係各位に多大のご迷惑をお掛けしたこともあった。そんな頑固な面と生来の毒舌とが絡み合い、口書を撒き散らし、人知れず相手を傷つけたり、恨みを買ったりしたことも多々あったと思うが、何卒ご

容赦願いたい。

教室では、肺、食道の研究にも従事したが最終的には人工弁の研究が主となった。和田弁の開発には大倉シャンツェの設計にも携わった北大工学部水力学教室の有江幹男教授のご指導を賜り、弁板の偏心度、解放角度などの基礎的研究に従事した。そのため、教室で行った心移植の年、患者急変のため和田先生が急遽帰札することになり、翌日予定の教育講演“人工弁置換術”を代行するよう命ぜられ、“会長、座長の了解は得てある”とスライドだけ渡された。切羽詰った状況下では致し方なく了承したが、あの緊張感は今でも忘れられない。

臨床面でも多くの患者に恵まれ、種々の手術もさせていただいた。最初は遊技から始まったが、自分より巧い人に出会い挑戦する、修練し凌駕することで自信を得る。この繰り返しで得た自信は他の分野にも好影響を与え、向上の原点となったと思惟しているが、挑戦できる環境に恵まれた人生にも感謝している。

胸部外科学会も時代に即応した、魅力ある学会としての発展が期待されている。これを成就させ得るのは現職の方しかいない。ご心労も多いことと思うがよろしく願いたい。

胸部外科に携わって60年近く経ち、海外を含め多くの人との出会いとまた別れもあった。殊に若い人の死は悲しい。

現在、胸部外科学会の最高齢者は古賀道弘先生で93歳になられる。小須賀健一先生の情報によれば、まだ現役で診療に携われ、週2回はゴルフを、月に2回ほど夜の街にもご一緒されていると聞く。大変嬉しく、頼もしい限りである。いつまでも長寿でと願っている。

“氷点”で有名な故三浦綾子氏の作品に“塩狩峠”という小説がある。この峠を越えて北へは医者はいきたくないといわれている。医師不足のため数年前からこの峠を越えた人口3万弱の名寄市で診療に従事している。因みに今年の立春日は札幌では体感できない－27℃を記録（最低は隣町で－31℃）している。野球部後輩の院長の支えと援けを受けながら外来を担当、週末だけ札幌で愛妻と過ごす生活を続けている。これも夫婦長持ちの秘訣かと思いつつ、若い時代の粗食に感謝しながら、まだ何とか元気に消光している。

胸部外科学会

今昔

昔ばなしとウラ話



小松 作蔵

医療法人社団 三愛会理事長

1955年 札幌医科大学医学部医学科 卒業
同上 附属病院にて実地修練
1956年 札幌医科大学 研究生（外科学教室）
1959年 “ 助手（同上）
1965年 “ 講師（外科学第二講座）
1969年 “ 助教授（同上）
1978年 “ 教授（同上）
1986年 “ 副学長兼附属病院院長（4年間）
1996年 定年退職

趣味：スポーツ鑑賞
好きな言葉：挑戦、熟慮断行

挑戦とその検証 “Challenge and Its Verification”

第69回日本食道学会学術集会について 小澤 壯治 東海大学医学部消化器外科 教授

このたび、第69回日本食道学会学術集会を平成27(2015)年7月2日(木)・3日(金)の2日間、パシフィコ横浜で開催いたします。

近年の科学技術の急速な発達に伴うめざましい医学の進歩により、食道疾患に対する診断と治療はより一層、多様かつ横断的となりました。従来の外科的治療に新たな手術方法である内視鏡下手術が加わり、また化学療法や内視鏡治療などの内科的治療、そして放射線治療が行われています。さらに、周術期管理も重要視されるようになりました。高度な知識と技術が求められる食道疾患に対する診断と治療において、基礎的に臨床的に挑戦を続け、その結果をより専門的に検証することが重要であると考えています。そこで第69回学術集会ではテーマを「挑戦とその検証」としました。

主題セッションはシンポジウムを「アジアにおける食道扁平上皮癌の治療―食道癌の内視鏡下手術―2015年まで

の総括―」を、パネルディスカッションは「食道癌ESDの適応拡大―追加治療の必要性和経過観察法について―」「GERD, Barrett食道癌の診断と治療―とくに治療法の選択について―」「食道癌の術前補助療法功罪―補助療法無効例の選別と周術期の対策―」「頸部食道癌の治療戦略―CRTと外科的治療の住み分けと合併治療―」「食道再建法・吻合法―最良の方法は―」、そしてワークショップは「食道癌狭窄・穿孔の治療―バイパス手術とステント挿入―」「食道癌術後合併症の診断と治療―新しい工夫―」「食道運動障害の診療―新しい診断法と最も有効な

治療について―」を設けました。

国際シンポジウムでは、アジア地域における食道癌治療について、インド・台湾・香港・韓国のハイボリュームセンターから演者を招き、様々な環境や条件の中で試行錯誤して取り組んできた研究成果についてご発表いただきます。

他方、一般演題はポスター発表が中心となりますが、手術手技関連の内容で興味深い発表についてはVTR発表をお願いすることにいたしました。

年々、発展を遂げる「みなとみらいエ



リア」にございますパシフィコ横浜で、多くの議論が交わされることを期待しております。先生方のご参加を心よりお待ちしております。



所属：東海大学医学部 消化器外科
卒業大学：慶應義塾大学
1981年 慶應義塾大学医学部 研修医(外科)
1982年 社会保険埼玉中央病院外科出向
1983年 足利赤十字病院外科出向
1984年 慶應義塾大学医学部外科 助手
1987年 浜松赤十字病院外科出向
1988年 米国ニューヨーク州立大学バッファロー校に留学

1991年 足利赤十字病院外科出向
1991年 慶應義塾大学医学部外科 助手
1999年 慶應義塾大学医学部外科 講師
2005年 藤田保健衛生大学医学部外科学 教授
慶應義塾大学医学部 客員教授(外科学)
2009年7月〜 東海大学医学部消化器外科 教授
趣味：水泳・ゴルフ・スキー
好きな言葉：人事を尽くして天命を待つ

血管外科と血管外科医の未来

第43回日本血管外科学会学術総会について 井元 清隆 横浜市立大学附属市民総合医療センター 心臓血管センター 教授

第43回日本血管外科学会学術総会は2015年6月3日より5日までの3日間、パシフィコ横浜にて開催されます。大会3日目に第9回日韓血管外科合同会議が同会場で同時開催されることもあり、例年より半日早く第1日目の午前に第21回日本血管外科学会教育セミナー、第1日目午後より学術総会とさせていただきます。

血管外科領域では近年の著しい科学技術の進歩により、治療体系がめまぐるしく変化しつつあります。このため学術総会で将来の血管外科医療、血管外科医像を描くことができるよう、テーマを“血管外科と血管外科医の未来”とさせていただきます。

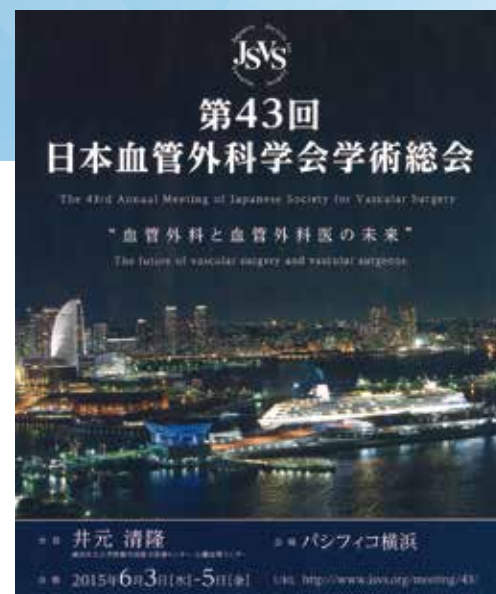
1990年に手作りの大動脈ステントグラフトが初めて使用されてからまだ20年あまりしか経過していませんが、商品化とともに急速に普及し、腹部大動脈ステントグラフト症例数は厚生労働省の

認可後8年でopen surgeryの手術数を上回るようになっております。今回の学会で長期遠隔成績からこのステントグラフトの有効性について検証していただく予定です。B型大動脈解離では発症後5年で保存的内科治療に比べ初期ステントグラフト治療が優れているとの報告がありますが、この著者を招き今後の治療の方向性につき議論していただきます。また末梢動脈疾患では血管内治療の進歩、適応拡大がみられる一方、distal bypassも普及し、良好な成績が得られております。最も患者さんに適した治療法を選択すべ

く本学会では血管内治療を行っている内科系医師も交え治療法の選択につき討論していただきます。

iPS細胞の発見で新たに自己血管を構築することが可能となり、血管病の治療は大きく変化していくと思われます。本学会では最前線でこの開発および臨床応用を研究されている方にお話していただき、未来像を知る手がかりにしたいと思っております。

血管外科、血管外科医の未来に向けて少しでも有意義な学術総会となりますよ



う皆様のご参加をお願い申し上げます。



所属：横浜市立大学附属市民総合医療センター、心臓血管センター 外科
卒業大学：横浜市立大学昭和51年卒
1976年 横浜市立大学医学部卒業
1978年-1800年 東京女子医科大学附属心臓血圧研究所 医療練士
1989年-1990年 University of California, San Diegoに留学
1991年 横浜市立大学医学部病院講師

1992年 テキサス州Baylor College of Medicineに短期留学
2001年 横浜市立大学附属市民総合医療センター、心臓血管センター 外科助教授
2008年 横浜市立大学附属市民総合医療センター、心臓血管センター 外科教授
趣味：釣り、スキー、温泉、ゴルフ、将棋
好きな言葉：特になし

編集後記

皆様、お気づきでしょうか？ 今回から横書き紙面になりました。数値やアルファベットがスーッと流れていることと思います。今回のトップは「みんなできょうインパクト・ファクター」です。HPに載っているインパクトのあるこのコピーをご存知と思いますが、GTCSをもっとglobalにするために、戦略としてのIFとは、見通しは、いかにすればいいか、会員は何をしたらいいか、ラガーマン大北先生の突進の文章です。

年明け、住まいの隣に貸し農地ができたので5坪ほどの1区画を借りました。1月に耕して2月に石灰をまき、3月に畝を作って2週後、ハウレンソウの種蒔きと種じゃがいもの植え付けをしました。窓から眺める畑は土色の畝が7本並んでいるだけでしたが、2週ほどすると、緑の点々が見えてきました。ハウレンソウです。隣の畝にはじゃがいもの若い芽と

葉が顔を出していました。それから、ハウレンソウは若葉マークですが、じゃがいもはぐんぐんと葉が増えて10数cmの丈になり、頼もしい植物です。1980年代、若い世代の目標であった日本胸部外科学会雑誌、続くGTCSは、植えれば一気に芽が出て葉が繁り、おいしいじゃがいもが期待できる高品質の種芋です。IFでglobalに躍り出ることを期待したいものです。

「ピンチはチャンス」強い決意で心臓外科医を選択した立石先生の志を感じます。googleれば、一人の母としての幅のある視点の「育児は育自」や「先天性」に取り組む医師の思いに出会えます。High IFです。

広報委員会委員長 千原 幸司

日本胸部外科学会 NEWSLETTER

JUST NOW JATS

No.29
2015年5月10日発行

発行 ● 特定非営利活動法人 日本胸部外科学会
〒112-0004 東京都文京区後楽 2-3-27 テラル後楽ビル 1F
TEL ● 03-3812-4253 FAX ● 03-3816-4560
URL ● <http://www.jpats.org/>

編集 ● 日本胸部外科学会 広報委員会
E-mail ● jats-adm@umin.ac.jp

デザイン・制作 ● 株式会社 杏林舎